

## ゆらぎ

ゆらぐ

守屋 信

揺らいでいる。過去が、現在が、未来が。時が揺らいでいる。空気が、月の光が、木の葉が、水面が。揺らぐ世界で私たちは生きています。深夜の暗闇の中で、あるいは星空の下で、私は待った。何かがやって来るのを、息を殺して、ただ待ち続けた。私の魂は揺らいでいた。

このまま闇に溶けてしまえ。溶け出した体は土に染み、空に漂い、宇宙に還っていくだろう。私は世界に飲み込まれ、そして世界になる。

揺らぎ続ける「今」が、内なる揺らぎと呼応するように、私たちの存在を揺るがしている。しかし立ち止まっていけない。いつか時が満ち、私たちの「ゆらぎ」は圧倒的な力を持つだろう。

歩き続ける。走り続ける。この「ゆらぎ」の向こうへ。あの「ゆらぎ」の向こうへ。

冬

茶夜

どこからも切れると謳うパッケージ沈黙はまだ破れないまま

カーテンの収斂をただみつめてる眠る地球の呼吸のようだ

死んだらオパールになりたい 変な形の爪にラメを塗る

お別れの前に吐き出す言葉たち食塩水が飽和する冬

去来

山本タカノリ

線香の細い煙がゆらぐ。その様子は神秘的であるとも、情緒的であるとも言える。亡くなった者がそれを食べるという話もあるくらいだ。正直、あまり腹の足しになりそうにない。その鎮静効果のある香りは、死別した者との安らかな繋がりを助けているのかもしれない。

もちろん、ゆらぐのは物体だけではない。比喩的な意味の広がりから、私たち個人の立場や生活がゆらぐこともある。二十歳周辺の私たちに「ゆらぎ」は身近な危機だ。危機という少し大ききである。人間関係、家計、成績、進路、やりたいこと、やりたくないこと、あるいは、何もやりたくないということ。挙げればキリがない。

ゆらぎ、戸惑い、思い悩むことに一般的な意義を見いだすことは、とても難しい。そういった「ゆらぎ」は常と同様であるとは限らない。むしろ、時間的には一瞬たりとも同じことはない。場所においても、物理的な位置や他者との関係について、ユニークな「ゆらぎ」はほとんど再現されることはない。また、見いだしたものが常に「正しさ」を与えられるとも限らない。

「ゆらぎ」そのものはどうだろうか。私の「ゆらぎ」は、あなたの「ゆらぎ」は、他の誰かに伝わるかもしれない。ただし、これもまたあまり腹の足しになりそうにない。それでも、ゆらいでしまう私たちは無意味だとは思わず、同様にゆらぎ、そしてまた新たな「ゆらぎ」が期待されているかもしれないと思ってしまう。

